

# 天使のはしご

R a i n 坊

教会で日課の祈りをささげていると、おぼれの私の前に希望の光が立っていた。

私の前にいたのは一人の小さな女の子。彼女が着ている絹の衣はまばゆいほど白く、まるで白百合を纏っているかのようなだった。しかしそれ以上に印象的だったのは彼女の肌。透き通るほど純白な彼女の肌は、触れるにはあまりにも美しく、そして儂く見えた。私と同じでくるとした髪をしているが、おぼれの私と違ってその髪は実に艶やかで見事な金髪だった。一方、私は艶と色をとうの昔に失ってしまい、肌だって一度刻まれたしわやシミを受け入れてしまっている。

それにしても見かけない子だ、と私は思った。

「あなたは何を望むの？」

口を開いたかと思うと、少女は唐突にそう言った。私を覗き込んでくる女の子の瞳から目を離せなくなっていた。

「……の、望み、とな？」

彼女が何を言っているのか理解できず、言葉を繰り返してしまった。それに呆れることなく、彼女はこう言い直した。

「あなたをずっと見ていました。あなたは毎夜、熱心に教会に来ては祈りをささげています。けれど、見ている限りあなたはどうも神に祈りをささげているわけではないみたいです」

私の手が震え始めた。彼女の言ったこと

が当たっているからだ。彼女は続けた。

「ですので、何かあなたには叶えたいこと、つまり望みがあるのではないかと思いませんか。だから私はあなたに問うたのです。

『あなたは何を望むの？』と」

持っていた本とペンを落してしまった。

震える手を私は力いっぱい握り締めた。痛みが走ったがそんなことお構いなしにぎゅっと握った。そうしなければ私の双眸から涙があふれてしまいそうだからだ。おぼれとなった私がこんな小さな女の子がかける言葉によって、長年胸中に秘めていた想いを奮い起こされたと知られるのが我慢ならなかった。何より——何より一番嫌だったのは目の前の彼女にそんな醜態を見せることだった。彼女にはそのようなものを見せるのはいけないことだと私の何かがささやいているのだ。穢してはいけないと切に訴えてくるのだ。私は揺れそうになる声を必死に整えて叫んだ。

「私の望みは、偉大な小説家になることです！」

「静かな教会に私の声が隅々までわたっていく。彼女は、

「ほう」

と、興味深そうにうなずいた。だから私は言葉を続けた。

「私は妄想をするのが好きな子どもでした。貧乏だった我が家には玩具など買う余裕もなかったものですから、その影響もあるのでしょうか。しかし一番の理由は、自分がどんな立場や境遇であろうと色んなことを体験できるからです。経験できるからです。とある事情で貧乏暮らしをしていた私が王様になって国を治めることになったり、勇者となってモンスターや悪党を軽快になぎ

倒していく、はたまた水の中を自由自在に駆け回り、休息の場として利用していた湖で出くわした妖精と恋に落ちたり——等々。本当にそれは多種多様で、現実では無理だと諦めてしまうことも私の頭の中では不可能ではないのです。無限大なのです。なんなら空を飛ぶことだって可能なはずです。私の妄想においては」

彼女がクスツツと笑っているのを目の端で捉えた。何がおかしかったのか分からなかったが、興が乗ってしまった口を閉じることができなかった。

「妄想する時間は私の中で最も至高な時間でした。こんなすばらしいことはないでしょう。こんな輝かしい特技は他にはないでしょう。皆も私と同じように妄想ができれば幸せになれるのに。当時の私はそのように思っております。そんな幼少期を過ごした私ですから当然、そのような妄想を活かせる職業として作家を目指すのは必然と言えるでしょう！」

ここで私は言葉を区切った。自分でも気づかぬうちに熱くなっていたようだ。息が上がっている。ここまで熱くなったのはいつ以来だろうか。私はしばらく息を整える。そして、

「……けれど、やはり現実から逃げることは叶わなかった」

続けた言葉は先ほどまでの熱はなくなっていた。私は喉から言葉を捻った。

「私の書いた話は面白くないのです！ これっぽっちも!! 妄想であれほど輝いていたお話も、いざ書いてみるとどれもこれもちんけな話へと変貌を遂げるのです。あれほど勇敢で格好良かった妄想の中の私が、現実と同じように惨めで醜い奴へと変わり

果ててしまうのです。どうしてもそれが嫌で嫌で……」

喉が詰まり、言葉が止まる。何か得体のしれない大きなものが喉に引っかかっているようでとても苦しかった。私は顔を引きつらせながらゆっくりと正体不明のそれを嚥下する。

「……これは私の勘違いなのは、と思いき友人たちに見せたこともありました。しかし一様に眉間にしわを寄せ困った顔をするばかりで何も言ってくれませんでした。これほど我が胸中を苦しませるものはありませんでした。しかし、これで確信しました。私の話は面白くないのだ、と」

言葉の最後の方は自らを嘲笑するかのようには喋っていた。まるで己の過去を軽蔑するかのよう。

「これでは売り物にならないだろうとそれら駄作全てを葬りました。書いては友人たちに見せ、芳しくない反応をとられ、己の不甲斐なさに嘆き、葬る。そしてまた書き始めるのです。これらをおいづれとなる今の今まで続けてきました。けれど歳を重ねるにつれ、私の書いたものを見てくれる友人もめつきり少なくなってきました。一人、また一人と。今となっては私が何をやっているのか知る者はいません。それほどまでの時が経ってしまった。あつという間に経ってしまった。私がやっていることは何も変わらない。故に私は町の者たちに嫌われていることでしょう。偏屈な、気味の悪い爺とでも罵っていることでしょう。面と向かってそういう態度を取るものはいないが、恐らくそう思っているに違いありません。歳だけは無駄に取っていますすからな。町の最年長者として気遣ってくれているだけ。

本当に偉いものです。私だったらこんなじいさんに近付こうとは思わないですから。夢に現を抜かす大人など、迷惑なことこの上ない。まあ、ですがそれはいいのです。私がやりたいようにやって、なりたいたいようになれるよう奮闘した結果がこれならば甘んじて受け入れましょう。まったく、我を通すというのはそういうことでもあるのでしょうか。だからせめて私は良きことも悪きことも分別なく自分の内に抱え込むぐらいはしておかないと、あまりにも振り回された人たちが可哀相すぎる」

ここで私は一息つく。そしてため息交じりに、

「……それにしても時というのは真に残酷ですなあ」

と、しみじみとした気持ちで言った。

「変わらないつもりでも変化を余儀なくされる。ほら、見てください、この我がみすぼらしい身体を。私も若い頃は二日三日徹夜で軽く書いていたものですが、段々と身体が自由が利かなくなってきました。自分の書いている字も見えづらく、筆を執るのもやつの日も出てきました」

私はしわくちやになった自分の手を俯きながら眺める。そして改めて彼女の方を向き、

「ですが、私は諦めたくないのです!!」

目の前にいた彼女の姿がぼやけて滲んだように見えた。私は泣いていたのだ。あれほど見せたくない、いやだと思っていた姿を彼女に晒しているのだ。あまりにも歯痒くて、下唇を噛んで必死にこれ以上の痴態だけは避けるように我慢した。おいぼれになってもこれほど恥ずかしくて悔しくて惨めなことがあるのかと思った。

「あれほどまばゆい私の妄想を、現実などに冒されたままにしておけるほど私が私の妄想に対して抱く愛情とも恋慕とも呼べるような感情は軽くはない。それらの言葉にはできない『何か』がおいぼれた私の胸を、頭を、腕を、指を、そして筆を突き動かすのです! あんなに美しく楽しいものを現実に出せないなんてこと、私はそれがとても悲しいのです。そして悔しいのです。これでは私は死ぬこともできません。いや、私の妄想を完璧に書ききるまで私は死ぬわけにはいかないのです。ですから私が私にできるうるかぎりのことをしておきたいのです。祈りを毎夜ささげておりますのもそれ故にです。私は神にすがりついてでも誰かが唸るような、誰もが魅了されるような、誰もが目を輝かせるような、誰もがふと思わずため息をつきたくなるような、そして誰もがつらい現実から身軽に旅立てていられるような——それほど完璧な私の妄想を書きたいのです!!」

自分を語っている内にどうやら涙も流れ切ったのか、ぼやけた視界は元どおりになっている。彼女はいつの間にか足を組んで、説教台に座っていた。そして人差し指を唇に当てて何か思案しているようだった。小柄な彼女がどうやって説教台に座ったのかも謎だったが、それよりも彼女の様子がまるで講壇に立っているようで奇妙に感じていた。罰当たりな行為であるはずなのに、どうしてか私はこれから彼女から説教を受けるのではないのかとふと思った。座っているというのに、講壇に立たれている気がするとは我ながら本当に奇妙な感覚だ。

「なるほど、ね」

彼女はそう呟き、口元をゆるめた。

「いいでしょう。あなたの願い、私が叶えてあげましょう」

そう言って彼女は説教台から勢いよく飛び降りた。不思議なことに着地音がまるでしない——彼女の足は地についていなかった。万物の法則に縛られている私たちには到底叶うことができない現象が目の前で起きていた。

彼女は宙に浮いていたのだ。

「だって私は——」

小さな背には絹の衣より彼女自身のまばゆい肌よりも艶やかに、そして教会の窓から漏れ出る月光に照らされて白銀に輝く羽根がそこにはひろがっていた。

そう。これではまるで——、

「天使なのだから」

私は彼女が悠々と飛んでいる姿を、阿呆みたいに口をあぐりと開けてただただ見惚れることしかできなかった。教会内の煌びやかな装飾たち。その中でも特に彩強いステンドグラスと十字架を背景に、月明かりがスポットライトのようで、中心にいる彼女をさらに引き立たせている。その光景はまるで現実味を帯びておらず、実に華々しいものだった。教会の静肅な空気がより引き締まった——ような気がする。澄んだ水辺にでもいるかのようなどこか清々しい心地になる。彼女の存在がこの場の空間を浄化しているような錯覚さえ覚える。いや、実際にそうなのかもしれない。彼女曰く、私の目の前にいるのは小さな天使なのだから。

神に使えし、天からの光。

それがおいぼれた私の現実に降り立っているのだ。

教会は静寂に包まれている。お互い無言

で、清廉な空気を漂わせるこの場、この瞬間ではそれがある種の緊張感を感じさせる。ただそれで私が委縮しているかというところは間違いで、緊張は確かにしているも長年内に秘めていたものを吐露したからなのか、それとも理解してくれるものがいたからなのか。どちらにしても、どちらであろうと今ほど良き時はなかなか見つけられないことだろう。

これから何かが始まる。

外に出した分を取り戻すかのように、そんな期待感が私の胸には詰まっていたのだ。

++++

「改めてあなたに問いました。あなたは何を望むの？」

天使は悠然とした微笑みを浮かべながらまるで私を迎え入れるかの如く、両手と翼を広げ、幾度目かになるこの問いかけをするのだった。

「わ、わわ、わた、わたた、し、私、は……」

開けっ放しになっている口をなんとか動かそうとするが、どうにも上手くいかない。それとは反対に眼だけはしっかりと彼女の姿を捉えて放さなかった。いや、これはこれで上手く働いていないのかもしれない。見蕩れて、見惚れて、まばたきすら忘れてしまうぐらいに私の眼前を優雅に、軽やかに宙に浮いている天使の彼女。それは触れてはいけない非現実的な、それこそ私の妄想に出てくるような存在のようで、まるで

私の現実が麻痺を起しているみたいだ。幻想や幻覚を見ているようで恐ろしくも嬉しい。それにしてもただでさえおいさらばえたと身に染みて思い知らされていたのに、さらにここまで役に立たないものになれるとは思ってもみなかった。現在がどん底だと考えていたのだけれど、どうやらそこから先に穴を掘って突き進むほどの余裕があったようだ。驚くべき事実だ。この歳になつてある意味での可能性を知つたわけだ。この場合の可能性は悲観思考極まりないのだけれど。

「どうしたのですか？」

先ほどまで威勢よく雄弁だった私の口先が急に鈍くなったのを不思議に思つたのか、天使は首を傾げていた。なおも私は言葉を紡ごうとしたが、まるで駄目だった。

「今、あなたが本当に望むことを言えばいいのです。気兼ねなく、心からやりたいことをあなたの口から直接私は聞きたいのです。それだけのことをあなたはやってきたのですから」

天使は諭すように、優しく私に囁く。それがどれだけありがたいことか。そういえば、胸に温かさを感じるのはいつ振りだろうか。少しばかり己の人生を顧みたような気がした。

「……今、私が望むこと。やりたいこと」

するりと言葉が出た。もともとそれらの言葉を繰り返した。恐らく呟きにすらなっていないこともあっただろう。ふと、天使に視線を移した。彼女は地に足がついていないからか、忙しなくぶらぶらと足を動かしていた。その様子を見て、私は心を決めた。普段ならばそのような感情は心に留めて霧散するまで放置しておくところだが、

今回に限りそれを良しとせず、外に出すことにした。言葉を、自分を出すことにした。

「——たい」

「ん？」

「私は——あなたを書きたい！」

「……へっ？」

彼女は実に間の抜けた声を発した。今まで少女らしからぬ態度をとっていた彼女は、ここで初めて年端のいかない少女らしい表情を見せた。そこで改めて私はしっかりと、はつきりとした口調でこう言い直したのだ。

「私にあなたを書かせてほしい！」

「………あー、えっと、どういうことでしようか、それは」

彼女はしばらく呆然としていたが、咳払いをして毅然とした態度を取りなおした。それがなにより可愛らしい。私は緩みそうになる目尻と口をきゅつと絞つた。卑猥な爺と思われたくなかつたからだ。少女を目の前に老人が緩やかな笑みを浮かべる。孫と祖父が戯れている微笑ましい光景ではないか。もしくは実に犯罪的な光景ではないか。しかし私と彼女は先ほどあつたばかりの縁。似ている要素もくると捻つた髪ぐらいで、後は似ても似つかない。これでは誰も祖父と孫とは思えない。何より可憐な彼女とおいぼれの私を同一視するのは彼女にとっても失礼だ。そして後者の場合は洒落にもならない。言葉にするのもおぞましい。どちらにしても御免被る。だから私は自制しなければならぬ。自制して、こう言うしかないのだ。

「私は裸の君を書きたいのだ!!」

「はだかあああ？」

彼女は素っ頓狂な声を発して床に墜落し

た。翼が生えている背から落ちたのでそれがクツションとなつて衝撃はそこまでないようだった。のっそりと立ち上がったかと思ふと急にこちらをキツと睨み、

「何を言っているんですか、あなたは！」

と、怒鳴った。私はその様子を見て安堵した。彼女の素晴らしい柔肌に見てもついたら大変だ。それにしても彼女は威厳も一緒に落としてしまったみたいで、痲癩を起した子供のよう感情を剥き出しにしていることが私を大きく戸惑わせた。どうして彼女はここまで怒っているのだろうか。

「何って……。だってあなたが私のやりたいことを、望むことを言えとおっしゃったではないですか。私はただそれを忠実に従つて行動したまでです」

「だからって限度というものがあるでしょう。まったく、けがらわしい！ 大体、あなたは偉大な小説家を目指しているのです。何故それを願わないのですか」

「確かに私は偉大な小説家になりたいと言いました。だからこそ、私はあなたを書きたい」

「だからそれが理解できないというのです。先ほどまでの熱弁は嘘だったとでも言うのですか!？」

「まさか。あの言葉は真意ですよ」

「ならば——」

「ゆえに、私はあなたを書きたいのです」

「ああ、もう!!」

彼女は地団駄を踏んだ。翼もそれに呼応してか、ばさばさと荒ぶる。怒り震える主から逃げるように抜け出た羽根たちは無秩序に散らばり、有象無象の衆とかして辺り一面を埋め尽くす。

「訳がわからない。本っ当に腹立たしい！」

これだから人間は!! 曖昧な癖に変に頑固で。繊細かと思つたら大胆で、柔軟かと思つたら融通が利かない。私には人が理解できない」

白々しいまでの頬を真っ赤に染めて、彼女は憤慨していた。

「かっはっはっは」

私は彼女のそんな様子を見て、思わず笑つてしまった。それはもう満面の笑みだ。腹を抱えるとまではいかないが、目許に涙が溢れてくる。笑い過ぎて咳き込むほどだ。それがさらに彼女の頬の色合いをより濃くさせることだと分かつてはいたものの、どうにも止めることができなかった。案の定ではあるが彼女は、

「何を笑っているのですか！」

ますます声を荒げて地団駄を踏み、逃げる羽根たちの数もますます増えるのだった。私は溜まった涙を指で軽く拭くと、

「いやー、なに。大したことではありませんよ。まあ、でもあなたには分からないことではないでしょうかね」

と嘯くのだった。

「それはなんですか、私が阿呆とでもいうのですか！」

彼女は今にも襲い掛かってきそうな剣幕で怒鳴りつける。

「くっくっく」

さすがに明瞭な笑い方こそしなかったが、忍び笑いがつい漏れ出てしまう。

面白きことこの上ない。

彼女は人間を、私を理解することは一生できないだろう。天使の一生がいかにほどあるのかは知らないが、それだけは確実に言える。

だがそれでいいのだ。

彼女は、それがいいのだ。

私たち人間を理解できないからといって私が彼女のことを侮辱するかといえはそうではなく、むしろますます好感を強め、崇拜するだろう。神さえ信じない私が、天使は信じることになるだろう。信じて敬うことになるだろう。彼女は我々人間を理解する必要はないのだ。彼女の存在は我々人間とは格が違う。生きているステージが違う。彼女は私の妄想に登場する人物たちのようにピュアで、そして決して汚してはいけない存在だ。現実には汚されることなどないのだ。わざわざ私たちと同じ位置に落ちることなどあつてはならない。そもそもこうやって相對していることさえ奇跡のなせる業だと思ふ。それこそ、神のなせる業だと思ふ。だからこそこの奇跡を使つて、私は裸のままの彼女を書きたいのだ。先ほどはいきなりで戸惑つてしまつたが、今ならばつきりと言へる。この彼女を見たかつたのだ、と。今のような、素の、天の使いであることを意識せず、感情の赴くまま、自然体であるあなたという確固たる個を書きたかつたのだ。それほどの価値が彼女にはある。私が長年思ひ描いていた理想——つまりは私の妄想に近い、いやそれ以上の、予想外で想定外の至高とでもいうべきか。もう彼女と同じ存在など二度と私の前に現れることはないだろう。若い先短いこの身でもあるし、今までも出会うことがなかつたのだ。これからもそんな幸運が訪れるなんてことはないだろう。また出会えるなどと、そこまで樂觀的になるには私は多くの別れを経験し過ぎた。だから今のこの機会しか私には残されていないのだ。

「もう知りません!! いかにかに神に言われ

たこととはいへ、あなたのような下賤の輩のことなど私には関係ありません。私、帰らせていただきます」

「どうやら彼女は怒りの限界点を通り越したらしく、今にも飛び立たんとしている。

「ちよつとお待ちください。それは困ります」

私は彼女の衣を掴んで引つ張り、なんとか飛び立つのを阻止した。どうやら衣の強度があまり高くないのか、彼女は無理矢理飛んだり、引つ張り返したりはしなかつた。代わりに、

「それこそ知つたものですか。むしろ困りなさい、このケダモノ! 人間の屑!! あー、すみません間違えました。人間自体がそもそも屑でしたね。私としたことが言葉を誤りました。訂正しますね——この屑以下の塵が。ちなみにこの発言に對しての誤り、ましてや謝りは絶対にありません」

などと、罵倒を私に浴びせかけるのだった。背筋に奇妙な感覚があつた。それは虫が這いあがつてくるような、痺れるようなそんな感じだった。よく分からない奇妙な感覚に手の力が緩みかけたが、逃がしてはならないという強い思ひから残り少ない歯を食いしばる。それでどうにか衣を離すのだけは免れた。だが、このままではいづれこの手を離してしまい、彼女に帰られてしまう。だから私は彼女を宥め、説得することにした。

「落ちて着いてください天使様。とりあえず、どうして駄目なのか教えてもらえないでしょうか」

「それは当たり前でしょう。その……なんか倫理的に」

口ごもりながら彼女はそう言った。

倫理的に？

それは一体どういうことだろうか。どうして彼女の自然体を書くことが倫理的な問題に繋がるのだろうか。私には不思議でない。

「しかし願いを叶えるとおっしゃったのはそちらですよ。天使というのは一度言ったことを違えるものなのですか？」

「まさか！ それはあり得ない。神に誓ってもいいです」

「ならば我が願いを叶えることに何ら問題はないではありませんか！」

「それは……てつきりあなたの願いが偉大な小説家になることを前提とするものだと高をくくっていたから——いや、何でもありません。とにかくあなたの変態的な願いには付き合いません。諦めて違う願いにするか、願い自体を失くしてしまうか。そのどちらかです」

「むう……」

このままでは埒があかない。

そう思った私は少々説得の方向性を変えることにした。

「そういえば話は変わりますが」

「……なんでですか急に」

如何にも不自然な話題転換だったので、彼女に少々警戒されてしまったようだ。不審そうな顔をされた。

「先ほどあなた様は神に言われたから、といった塩梅の話がされましたが、これはどういう意味ですか？」

「……それをあなたに言う必要はないです」

これまで怒鳴りつけたり口調が荒くなることはあったが（まあ、どれもこれも私が悪いようなのだが）、その中で投げかけられたあの言葉よりもこの時の言葉は重く、そ

して冷たかった。

これは当たり前だな、と私は思った。

「ああ、それもそうですね。失礼しました」

しかしここで押すことはせずに、一端引くことにした。核心を一気に突いて逆上させても困る。

「正直、無理な願いだとは分かっているのです。私のようなもの相手に身を任せるなど、到底できるものではないでしょう。しかし、それを承知で私は頼みたいのです」

地べたにおでこをこすりつけるように私は頭を下げた。

「……ふん、無様ですね」

私からは見えないが、恐らく彼女は軽蔑の眼差しで私を見下ろしていることだろう。本当に無様だと思う。

だが、今更誇りなどいらぬ。

願いを叶える——その大事の前では実際に下らない。そもそも何かを成したことによって誇りは産まれるのだと私は思う。そういう意味では私はまだスタート地点にすら立っていないのだ。

私は頭を切り替えることにした。

現実と、妄想を入れ替える。

夢と現を行き交う私だからこそできる。

おいぼれのじいさんから——あらゆる事件を冷静さと理論によつて、些かニヒルに振る舞いながらも解決へと導く、そんな存在。そう、今の私は名探偵なのだ。

「——ところで」

「もういいです。あなたが何と言おうと、何をしようと私の意志が変わることはありません。あなたの下衆な願いは取り下げです」

「まあ、そう言わずに。それに今から話す内容は私の願いのことではありません。例



えば——そう、これは仮定の話。このおいはれの達者な妄想力を働かせた戯言だと思ってください」

彼女は怪訝そうな表情を見せた。だが、私の話を遮ろうとせず、ふわりと飛んで足を組み、手に顎をのせながら説教台に座った。どうやら彼女の興味は引けたようだ。

「あなたは先ほど神に言われて——といったようなことを言いました。まあそこはさして問題ではありません。あなた方天使は元より神の使いと、我々人間たちの中では呼ばれております。そんなあなた達のことです。神から何かしらの使いを仰せつかったのでしょうか。だからこうしてこのようなところにいる。まあ、そんなこと関係なくやって来る物好きな方も、もしかしたら天使の中にはいるかもしれないですが、それでも大抵は使命として降り立つことでしょう。勿論、あなた様がその『物好き』だとしたら話は代わりますが」

ここで一度話を止め、彼女の様子を窺った。すると手に顎をのせたまま、ぶいっと横を向いてしまった。横からだけでも不機嫌なのが見てとれる。どうやら物好きは意外と多いらしい。天使でいることに誇りを持ち、かつ人間が嫌いな彼女にとってそれはあまり面白くないことなのだろう。そして自分がそれらと同類扱いされたこともまた——などと邪推してみる。確認はしない。あまり機嫌を損ねすぎると話を聞いてくれないどころか本当に帰られてしまうだろうから。

閑話休題。

話を戻そう、いや話を続けよう。

「つまるどころ、天使であられるあなた様は神に何かしらの『使い』を頼まれたので

しょう。それが何なんのかまでは今の段階ではあまりにも情報不足ですので私には分かりません。ですがここで私が重要視するのは『what』ではないのです。現在注目すべきなのは『why』——つまり、なぜ？ です。なぜ、の問いに関して既にあなたは答えをご自分で言っておられます。そう、それが『神に言われたから——』というあの発言ですね——そして」

「話が長い。要するに何が言いたいのですか？」

彼女は結論を急かす。

「わかりました。私としては分かりやすく話しているつもりだったのですが、まあいいでしょう。それでは少々掻い摘んで」

軽く咳払いをしてから私は言った。

「つまり、神の使いで私の元へ来たと仮定すると、もし私の願いを断ったらあなたは墮天します、以上」

「何故そうなった!？」

いつの間にか私のところへ近づいていたかと思うと頭を叩かれた。しかし、まるで痛みを感じなかった。

「いや、だってそうでしょう。使いが嫌だつてことは、それ即ち神の意向に逆らうつてことではないですか。つまり墮天させられるでしょう、そんな天使」

「いやいやいや！ 神はそんなに狭量な方ではありません」

「そんなもの知りませんよ。だって私は神を見たことないのですから」

ましてや、

「——いるかどうかもう怪しいものですよ、神なんて」

「なっ!! 侮辱とみなしますよ!」

「まあまあ。そんなに顔を真っ赤にしなく

てもよろしいではないですか。ただの人間の戯言ですよ」

「いいえ！ 例えあなたの発言を神が許したとしても——恐らくそうなることに違いないですが、けれど私は絶対にあなたを許しません!!」

「なるほど。どうやら神は器が大きい方のようだ。少なくともあなたよりは」

「——っ！」

彼女は悔しそうな表情を浮かべたが、私の発言を否定することはしなかった。否定すると逆に神の器が小さいと肯定してしまうことになるからだ。

ふむ。どうやら私のペースだ。そろそろ畳み掛けるでしょう。

「ならば、同じ天使ならばどうでしょう」

「どういふことですか？」

訝しげな顔をして、彼女は問い返してきた。

「例えば、同じ職場の者が職務を放棄したと聞いてどう思いますかね。しかもその理由が嫌だからというだけで」

「それは——」

と、何かを言おうとしたが結局彼女は二の句が継げなかった。どうやら思い当たることがあるようだ。

「恐らく、我儘な奴だと思われるでしょうね。そうなってくると慈悲深い神がいくら許したとしてもその辺りが黙っていないでしょう。そうなってくると神としてもけじめをつけなくてはなりません。一人だけ鼻肩をしてはいけませんから。神として。だから墮天するしかなくなる。いやー、怖いですね。本当に怖い。私が関係作りで最も慎重になって、怖いと思うのは上の立場の者よりも同じ立場の者ですね。そ

こを敵に回すと守ってくれたり徒党を組んだりすることができませんからね」

「……………」

彼女は黙り込んで、愕然としているようだった。

どこの世界も環境も、変わらない。根本的に。根幹的に。何も変わらない。

だからこそ私は妄想という世に影響されぬものを心に抱くのだ。

彼女は呆けたまま、ぴくりとも動かなくなった。

先ほどの私もこうだったのだろうか。

そう思いながら、このまま時間が過ぎるのを待つのも何だったので、

「……墮天使」

ぼそりと聞こえるようにわざと呟いた。すると、

「うっ」

しかと彼女の耳に届いたようで一瞬怯んだ。そして悔しそうに、身悶えしそうなほど歯痒い表情を浮かべて、

「ああもう、分かったわよ！ 書きなさいよ、書けばいいじゃない!!」

と、半ば投げやりながらも彼女は確かに承知してくれた。

よし。

そこで私は目を閉じ、頭の中の現実と妄想を入れ直した。現実の私が帰って来る。そして今までの自分の行動発言を思い出し、多少の罪悪感に蝕まれた。今更ながら少し強引だったかなと反省した。これは詫びの言葉をかけなければと思ったところで、目をかっと見開く。すると驚くことに彼女はなぜか急に服を脱ぎだしているところだった。あまりの衝撃に咄嗟の言葉が出ない。そんな私の代わりに消え入りそうな声で彼

女はこう言った。

「……綺麗に書いて、ね」

ああ。私は今日、死ぬかもしれない。

そう思いながら愛用のペンと本をしつかりと持つのだった。

私の手はもう、震えることはない。

中中中

少しばかり人が多い、しかし都会と呼ぶにはあまりに口寂しく、物足りないを通り越して物が無い、なくはないが何がいいのか当人には分からないような、そんな片田舎においてだけ名が通っている我が町。そんな町の今朝の天気は曇天の空模様。どんよりと町全体が暗く、重苦しく感じる。空と町は同調しているのか、憂鬱な表情を浮かべる住民たちを多く見かける。

そんな中、俺は口笛を吹きながらのらりくらりと歩いていると教会に大勢の喪服姿の人がいた。

「葬儀の参列者、か……」

指で輪っかを作ってその穴から人々を覗き込んだ。ちなみに、この行動にさしたる意味はない。意味のないことを意味ありげにするのが好きなだけなのだ。

行儀よく並んで揃ってぞろぞろと動く黒い列は、まるで蟻たちのようでなんだか健康に感じる。蟻に健気さなど一度たりとも感じたことなどないのだが。

「それにしても——」

どこか高い身分の人が亡くなったのかな、と考えながらそのまま通り過ぎようとして、「あり？」

輪っかの中に——もとい参列者の中に頭一つ分抜け出ている奴を見つけ、ふと足を止めた。何故なら、それは俺の友人の頭だったからだ。

「ん？ ああ、おーい」

友人も俺の姿を捉えたらしく、こっちに手を大きく振ってきた。友人は何事も大きいのだ。大勢の視線が友人と俺に向けられる。

「うう……」

浴びるほどの視線にたじろぎ、少々の居心地の悪さを覚える。この場からすぐさま逃げ出したくなる。

しかし、だ。

せっかく人目を気にせず友人がこちらに手を振ったのだ。これに応えずして何が友人か。俺は友人の元へ出向くべく、参列者で密集する地帯へ足を踏み入れ——ようと考えた時点でとてつもなく億劫になり、結局それを行動に移すことはなく、友人にこいこいと小さく手招きをしてみせたのだった。誰が何と言おうとこれが俺なりの友情の示し方なのだ。

俺の手招きを見た友人はこれまた大きく頷くと、うごめく参列者の波とは逆方向にくねくねと動きながら抜け出してきた。わざわざ並んだ列を抜け出してくるとは。面倒なことだろうに、ご苦労なこった。どうも我が友人は俺に優し過ぎるきらいがあるようだ。

参列からやっとのことで抜け出し、俺の元へとやってきた友人は他の参列者同様、喪服姿だった。葬儀の列に並んでいるからそれは当たり前ではあるが、しかし普段一緒にあってふざけている友人の体裁を整えている姿はどこか新鮮に映った。

軽くまた挨拶を交わした後、

「随分と立派な葬儀じゃないか。どっかのお偉いさんでも亡くなったのかい？」

先ほど疑問に思っていたことを口に出してみた。

「お前知らなかったのか？ ほら、町はずれにある一本杉の丘に住んでるじいさんがいただろう」

「ああ。あの変人の」

「そうそう。そのじいさんの葬儀だよ」

「えっ、あのじいさんついに死んだのか。俺がガキの頃からじいさんだったからってきりずつと死なないもんだと思ってたよ」

「おいおい、不謹慎だぞ」

友人は一瞬、厳しい顔つきとなった。しかし直ぐに、

「まあ、正直俺もそう思ってたんだけどな」と、俺の軽口に笑みでこたえてくれた。

本当にいいやつだ。

「それにしてもあのじいさんの葬儀にこれほどの人数が来るなんてな。ひよつとしたら町の三分の一ぐらい奴が来ているんじゃないか？」

「さすがにそんなにはないだろう。あーでも確かにそのぐらいにも感じるな。こんなに密集していちやあ、な」

そう言うと友人は懐から煙草を取り出して火を点けた。深呼吸をするように吸い込み、ふうーっと一気に吐き出した。その際に出た煙草の煙が、上空に広がっている雲に繋がっていくようにゆらゆらと立ち昇っていく。

「実はじいさんってお偉いさんだったのか？」

俺がそう訊ねると友人は首を振って、「んーにや。それこそただのじいさんだよ。」

ただの、変なじいさんだったよ」

どこか遠くを見つめるように友人は言った。その際、煙草の先からぼろりと灰が落ちる。

「まっ、それでもあのじいさん、変人で無愛想ではあったけど、人柄だけはよかったからなあ。お前も散々面倒見てもらっただろう」

「そうだな……」

友人の言葉に頷きながら俺はじいさんの姿を思い浮かべていた。

俺が知っている限り、じいさんはいつも本とペンを持ち歩いていた。そしていつでもどこでも『何か』を書きこんでいた。道を歩いている時も、誰かと話している最中であっても、所構わず誰彼かまわずそんなことをやっていた。だから町の皆はじいさんを変人と呼んだのだ。

一度だけ俺は『何か』について尋ねたことがある。するとじいさんは、

「さあね、何だろうね」

と、曖昧にはぐらかすだけだった。本当に何をやっているのかはさっぱりだった。他の町民たちも何をやっているのかは知らない。

そういえば昔こんなことがあった。とある悪戯心を起こした将来有望なこと間違いなしの小僧が本を盗もうとする事件があった。その小僧は犯行を行う前に、俺がじいさんの本を盗んで謎を解き明かすといったようなことを町の人たちに吹聴していた。本来ならば叱って止めるべきなのだろうが、誰もがじいさんの本の中身に興味があるのは違いなかつたので小僧の悪戯を止めようとする者は一人もでなかつた。むしろ応援する者も出る始末。それがますます小僧を

調子づかせる結果となった。

そしていよいよ実行の日。町の誰もが固唾を飲んで見守る中、小僧は走ってじいさんの元へ向かい、本を奪おうとした。しかし本に手が届いた瞬間、大胆にすっころんでしまい、見事に失敗してしまった。じいさんは小僧が本を盗もうとしたことに気づいてとても怒った。すさまじい形相をしたじいさんに睨まれた小僧は逃げるのを忘れ、一本杉の丘にあるじいさんの家まで引きずられながら連れて行かれた。そして二日ほどたつてやつとじいさん家から帰ってきた小僧は言葉少なに、

「もうじいさんの本は盗まない」

と、だけ言って覚束ない足取りで自分の家に帰っていったのだ。その様子を見て、我が町の住人達は二度とじいさんの本には触れないでおこうと心に誓ったそうだ。そして、何を隠そうその将来有望で誰もが成し遂げられなかったじいさんの本を盗むという行為をやつてのけた町のヒーロー的な存在である小僧こそ俺なのだ。正直あれほど怖いことはなかった。まともに語るのも恐ろしい。だからたつた一言、誰かの物は不用意に盗むのだけは止めておくとだけ言うておこう。

このようなことがあったとはいえ、それでじいさんから人が離れていったかというところではない。むしろ彼にはよくよく人が集まっていた。どうしてかは分からないが、じいさんには不思議な魅力があった。つい構ってあげたくなるというか、ほっとけないとでもいうのか。相手をそういった心持ちにさせるのがとにかく得意なのだ。しかもじいさんにとってそれは意識的にやっているものではなくあくまで自然体でや

っているので、いくら不躰な態度をとられても皆、

「しようがないなあ。あのじいさんだしな」と苦笑しつつもやはり許すのだ。いや、許すというより受け入れるというニュアンスが近いかもしれない。敢えてそれを言葉にするなら相手の寛容な心を引き出すのが上手いじいさん、ということなのだろう。そう言えばじいさんは誰の隣にでもいるような人だった。

時には寄り添うように。

時にはつき従うかのように。

そしてまた、時には家族のように。

何も言わず。何も見返りなど求めず。

じいさんは傍にいてくれた。

ただ淡々と自分の世界に籠っているような人だったが、俺たちが誰かにいて欲しいと願うそんな時、じいさんは必ず近くにいてくれるのだ。

俺の母さんが亡くなった時もそうだった。俺は母さんと二人暮らしだった。貧乏は貧乏だったが母さんが必死になって働いてくれていたのでそこそこ幸せに暮らしていた。俺もやつと働ける歳となり、母さんに楽をさせてあげることができる。

そんな風に思っていたある日。母さんは死んだ。事故死だった。

母さんの死は予期せぬもので、事前の構えもなく、ただ死んだという事実を伝えられた時の衝撃は今でも忘れられない。親戚の誰かが淡々と葬儀を済ませる中、俺はただ呆然と立ち尽くしかできなかった。泣くことも、喚くこともできなかったのだ。そこまで感情や思考が追いついてなかったのだ。感情と思考が追いついた時、螺旋状に交り、混じりあって激情になって俺に襲い

掛かってきそうで怖かった。

そんな時だ。じいさんが俺の傍らにいたのは。

母さんの墓前で突っ立っていた俺の横に、いつのまにか胡坐をかいて座り込んでいた。勿論、足の上には本とペンが並んでいる。

彼は何も言ってくれない。慰めるとか助言をしてくれるとかそんなことは一切ない。いてくれるだけで何もしてくれない。彼はただペンをひたすら動かすだけだった。

けれど、だからこそ、それがなによりありがたかった。今となってはそう思う。この時の俺に何かしら言葉をかけていたら、恐らく俺は発狂していただろう。それほどまでの情だったのだ。こればかりは言葉で片付けることはできない。自分で、時間をかけてちよつとずつ処理していくしかないのだから。

じいさんは言葉どころか態度にすら表さない、不器用どころか不親切、不謹慎にも捉えられないそんな行動だったけど、俺は確かに助けられたのだ。救われたのだ。じいさんが熱心に一つのことに関心を注ぎこむその姿を見て、俺たちは励まされるのだ。

頑張れ、頑張れよ、と。

そのことを分かっているからこそ皆、じいさんを慕うのだ。じいさんに集まるのだ。受けた恩を返すがごとく、じいさんを一人にしておかないのだ。甲斐甲斐しく、世話を焼くのだ。

俺たちが見守るじいさんは歳相応に弱弱しく、常にいつ倒れてもおかしくない様子だった。それでもひたすら前だけを向いて頑張る姿に、我々は今を生きる力を貰っていた——そんな気がするのだ。

我が町を訪れることがある際はじいさん

のことを誰かに尋ねてみるといいだろう。

恐らく誰に尋ねてもこういうことだろう。

「変なじいさんだよ。けど悪い人ではない。ただ変で、人のいいじいさんだ」

と。

中中中

「ところでどうしてここで葬儀やってるんだ？ あのじいさん、神様信じるような玉じゃなかったと思うんだが」

俺は教会を指さしながら訊ねた。

「ん？ ああ。いや、何でもここ最近通い詰めていたらしい。通い詰めて、いつも思いつめた顔をしていたらしいぜ。もしかしたら自分の死期を悟っていたのかもしれない」

「……ふーん、そうか。ちなみに死因は？」

「それがよく分からないんだよな、これが。恐らく、年齢的に寿命だとは思うんだが。」

それにしたって妙な亡くなり方だったらしい」

「妙？」

「ああ。じいさん、教会の説教台のところにもたれかけるように亡くなっていたらしい。神父がそれを見つけたららしいんだが、何だかこう——幸せそうだったらしいんだよな」

「幸せそうだった？」

最期の者を表す表現としてはあまり聞かない言葉だったので思わず繰り返してしまった。

「そう。幸せそうに、子供が満足して眠ってしまったみたいにならかそうな表情だった」

たらしいんだ。しかも大事そうに本とペンを抱きかかえながら。だから最初、神父も寝ているだけだと勘違いしたらしくってな。亡くなっていると分かって随分と驚いたらしいぜ」

「それはまた——」

よかったじゃないか、と続けようとして自粛した。思っても口に出すことではない。ましてや当人の葬儀が行なわれている日には、特に言うべき言葉ではないだろう。

しかし、それでも。自分を偽ることはできない性分なのだ。だから、よかった。

と、口には出さずとも、態度に出すこともないけど、心からそう思うのだった。

「あれ？ それじゃあ、その本はどうなったんだ？ じいさんと一緒に弔うのか」

「いや、それがそうじゃないんだ。神父も他の町民たちもそうしようとしたんだけど、しなかった——本の中を見てしまったから」

「本の中!! 確かにじいさんが死んでしまった以上、止める者はいないものな。処分を決めないといけないし中身は見る必要があるか。うーん、それにしてもどんな内容なんだろうな。あつ、そうだ！ じいさんと一緒にしなかったのなら今どこにあるんだ、その本」

盗人になってまで中身を見たかった俺としてはこの事実はかなり興味をそそるものだ。ましてや見ることに失敗している分、お預けを食らっているようなもので他の人よりも知りたいという欲求は強いと自負している。

「教会に置いてあるよ、誰でも見れるようにしてあった」

「そっかさっか。見に行きたいなあ。あー

でも見たくないような気もするし。でも気になる。あつ、でもその言い方だともしかしてお前も見たのか、中身」

「ああ」

「どうだったんだ！ それはもう、ご大層なことが書かれていたんだろうな」

「いやー、それがさあ」

と、また煙草を取り出し火を点ける。俺は話を早く聞きたくて、煙草湿気ろと思つた。友人は煙草を吸う最初の動作が実にのろまなのだ。緩慢な動作でやつと最初の一回吸いが終わった。その間、俺は友人の前を行ったり来たりと実に落ち着きがなかった。そして待たされた挙げ句、

「いやー、まったく分からなかった」

と、笑いながら言うのだった。

「ちよつ、分からなかったってどういうことだよ。お前、字が読めないってわけじゃないだろ」

「それはそうなんだが。だって分からないものは分からないだよ。読めないんだから」

「読めるけど、読めない？」

俺は困惑した。字は読めるのに分からない。だって読めないから。どういうことだろうか。意味がわからない。謎かけでも出されているのだろうか。ここで小気味よい返しをすれば正解でいいのだろうか。それはそれで意味が分からない——などと思索しているうちに考えが考えを呼び、思考の袋小路に入ってしまった。

そんな俺を誘導するかのように友人は言った。

「だって文字になってなかったんだよ。字そのものが、さ。ミミズみたいにのたくつたような字が並んでいるばかりで何て書いて

であるのかまったく分かんなかった」

「ああそういうこと」

それならそうと早く言ってくれ。危うく勘違いするところだった。

「クセ字ってことなのかな、それって」

「どうだろ。もしかするとじいさんにも読めないかもしれない。今際の際にやっこのことで書いたものかもしれないしね」

「あー。あのじいさんなら有り得る」

「だろ」

互いを見合って俺たちは笑った。大いに笑った。

「そういえば昔、こういうこともあったよな。じいさんが公園で——」

「そうそう。これも覚えてるか。冬の祭りごとの時にじいさんに言い負かされた——」

自然と俺と友人はそうやって昔の思い出を語り始めた。俺と友人が友人になってから現在まで。そのいづれにもじいさんはいる。彼は本当に俺たちの傍らにいたのだ。

そして、いなくなったのだ。

会話をすればするほどそれを意識してしまふ。友人もそうなのかもしれない。だって——昔話に花を咲かせて笑い合いながらも、俺たちの間に緩やかな雨が頬を伝うのだから。

曇天の空はまだ晴れない。

中中中

気になった俺は友人に問いなおした。

「ああ、そうだった、そうだったな……」

友人は頭を指で掻きながら笑っていた。照れ隠しにも感じるその微笑みが、どこか名残惜しそうに見えたのは俺の気のせいだろうか。

それとも——。

いや、これ以上は止めておこう。他人の心境を探ることほど詮無きことはない。俺は友人ではないのだ。他の誰でもない俺なのだ。友人が友人そのものであるのと同じように。誰にも推し量れないのだ、心というやつは。それでも友人は、

「あれなら教会だよ」

と、しつかり答えてくれた。それで俺は良しとするべきなのだ。探られたくない胸の内は誰の中にもある。友人にも、俺にも。だから俺は何も気付かなかった振りをして会話を続けることにした。

「教会に？」

「ああ。教会の中で展示されてたよ。誰にでも見れるようにしてあった」

「でも本の中身、読めなかったんだろう。何でそんなもの展示する必要があるんだ？ しかも教会で」

価値ある内容であればそれも分かるものだが、じいさんの本の場合そもそも読める代物ではないのだ。つまりは——いらなくねってことを遠回しに言っているのだ。

「まあ、そうなんだけど、な」

俺の意図が分かっただらしく、歯切れ悪くはあったが友人は肯定した。しかし、

「ただな——」

と補足が入った。

「ただ、確かにあの本は書物としての機能は果たしていないんだけど、だからといっ

「それで結局、じいさんの本はどうなるんだ？」

昔語りが一区切りつき、再び本の行方が



て価値がなかったわけじゃないんだ」

「ああ？」

友人の言っている意味が分からなく、思わず柄の悪い態度を取ってしまった。咳払いを一つして気を取りなおす。

「それでどういう意味だ、それ」

「ああ。確かにミミズみたいな字でとても読めたものじゃない。けれどな、その本、というか字？ を眺めていると奇妙な感覚に陥るんだよ。だからな。えーと、言葉にするのが難しいな。んーと、なんだかこう——神々しいんだよ」

「神々しい？」

俺は首を傾げる。それを見て友人は、「そうだよなー。自分で話しても分からない。何て言えばいいんだろうな、ああいうのは」

苦笑しつつ友人はそう言っただけのけりだった。

「おいおい、しっかりしてくれよ。見てもいない俺が分かるわけないだろう」

「いやー、全くその通り。でもな、本当にアレは実際に見た者にしか分からない感覚だと思う。敢えて言葉にするなら、思わず跪いてしまうような、神聖な何かと接している時のような感覚っていうのかな。うーん、ちよつと違うか。とにかく見れば分かるさ」

そう言っただけで、快活に笑う友人だった。

じいさんの本の謎はますます深まるばかりだ。本の詳細を知ろうとすればするほど正体が掴めなくなってくる。雲を掴むようなものだ。分かったことといえばミミズみたいな字で本としては意味を為していないこと、そして友人が笑い終わった後にぼろりと呟いた、

「でも間違いなく、あの本はじいさんの魂が込められているよ」

ということだけだった。

中中中

ふと空を見ると雲の切れ間からわずかに光が降りそそいでいる。

「……天使のはしご」

天使のはしごと呼ばれるその情景の美しさに思わず目を細めてしまう。微かに漏れ出る光は儂く、しかし眩しくもあった。眼を陽の光で焼かれてしまったとしてもいつまでも見ていたいと思うほどに、それは素晴らしい光景だった。

光が徐々に強くなってくる。

あまりの眩しさに手をかざして遮ろうとしたが、それでも目を開けているのが辛かった。

視界いっぱい光が溢れる寸前——、  
バサバサ。

と、何かが羽ばたく音が聞こえた。なんだろうと思ひ、少しだけ音の鳴る方へ視線をやってみた。視界の端に微かにではあるが、羽根が見えた。一瞬しか見えなかったけれど、しかしそれだけでも綺麗ということだけははっきりと分かった。その羽根は光芒に照らされて白銀に輝いていたのだ。

光がさらに強くなる。  
もう目を開けていられない。

バサバサ。

また何かの羽音が聞こえた。  
音の聞こえる方に顔を向ける。  
そこで俺は——見た。

眩しさのあまり己の眼を一瞬疑ってしま  
ったが、けれどしっかりと俺はそれを捉え  
たのだ。

死んだはずのじいさんと、見知らぬ少女  
の姿を。

少女は白い絹の衣を着ていた。そして少  
女の陽に当たっている肌は真珠のような光  
沢を放ち、くるりと捻じれている髪が実に  
可愛らしい。そしてその小さな背には――  
白銀の翼が生えていた。

二人は宙を浮いている。

じいさんは小さな女の子に手を引かれな  
がらはしこのその先――より光が強く輝い  
ているところへと昇っていく。

眩しさのあまり、そこで俺は目を閉じた。  
その時間もまた一瞬。数秒にもみたくない  
僅かな時。しかしこのわずかがひどくもど  
かしくあった。

再び俺が目を開けた時には二人の姿はな  
く、あれほど強かった陽の光も落ち着いて、  
実に晴れ晴れしいものだった。

あれは何だったんだろうか。

二人がいた場所を見つめながら、俺は先  
ほどの光景を思い浮かべた。

二人の姿はまさに蝶々囀々。

仲睦まじく、手を取り合って語らってい  
るように見えた。些か、少女の方が煙たそ  
うにしているようにも見えたが、握った手  
を離すことをしないあたり、俺の気のせい  
だろう。なんだかんだで仲が良いのだろう。

しかし何より印象的だったのはじいさん  
だった。少女と語り合いながら導かれてい  
くじいさんの表情はほころんでいて――本  
当に幸せそうだった。

旅立つことに一切の不安も、未練も憂い  
もない。これからが楽しみで楽しみでしか

たない、そんな在り様だったのだ。

「どうしたんだ？」

呆気にとられ、俺が急に黙ってしまった  
ので友人が心配そうに様子を窺ってくる。  
俺は、

「何でもないよ」

と、少し頬を緩めながら言った。

そうだ。本当になんでもないのだ。

ただ、そう。

ただ単に俺は――嬉しいだけなんだよ。

「そっか、何でもないか。それでお前はど  
うするんだ。じいさんの葬儀、来るのか？」

「ん？ ああ、そうだな……。いや、俺は  
いや。喪服なんて着てないし、というか  
持っていないし。それに――さよならは言わ  
ない主義なんだ」

「……そっかあ、わかった。それじゃ俺  
は葬儀に戻るよ」

「ああ、またな」

そう言って俺は軽く手を上げる。友人も  
同じように手を上げると、列の波へと戻っ  
て行った。これまた器用にすいすいと、大  
きな身体を揺らしながら。

一人になった俺は、また空を見上げる。

あの強い光が雲を蹴散らしてしまったの  
だろうか。先ほどまであれほど曇っていた  
空は今ではすっかりと晴れ、透けてしま  
いそうなほどの青空が顔を見せている。もし  
かすると、水晶の中から外を見るとこうな  
のかもしれない。透き通っていて、ピュア  
で、陽の光が入り込むと中で反射し合っ  
てきらきらと輝く。きっと俺たちを照らす  
のはそんな光なのだ。

ゴォーン。ゴォーン。ゴォーン。

教会の鐘が鳴りだした。鐘の音はこだま  
しているのか、重なり合って聞こえてくる。

高く重なり合う音たちはどこか悲しげで、  
しかし誰かを祝福しているかのように綺麗  
な音色だった。

俺は一度止めた歩みを再び戻した。  
一歩。また一歩と。

地面を踏みしめる確かな感触と靴音を味  
わいながら。

そしてぼつりと、

「元気にやんな、じいさん」

そう呟く俺は、二度と後ろを振り返らな  
かった。

(了)